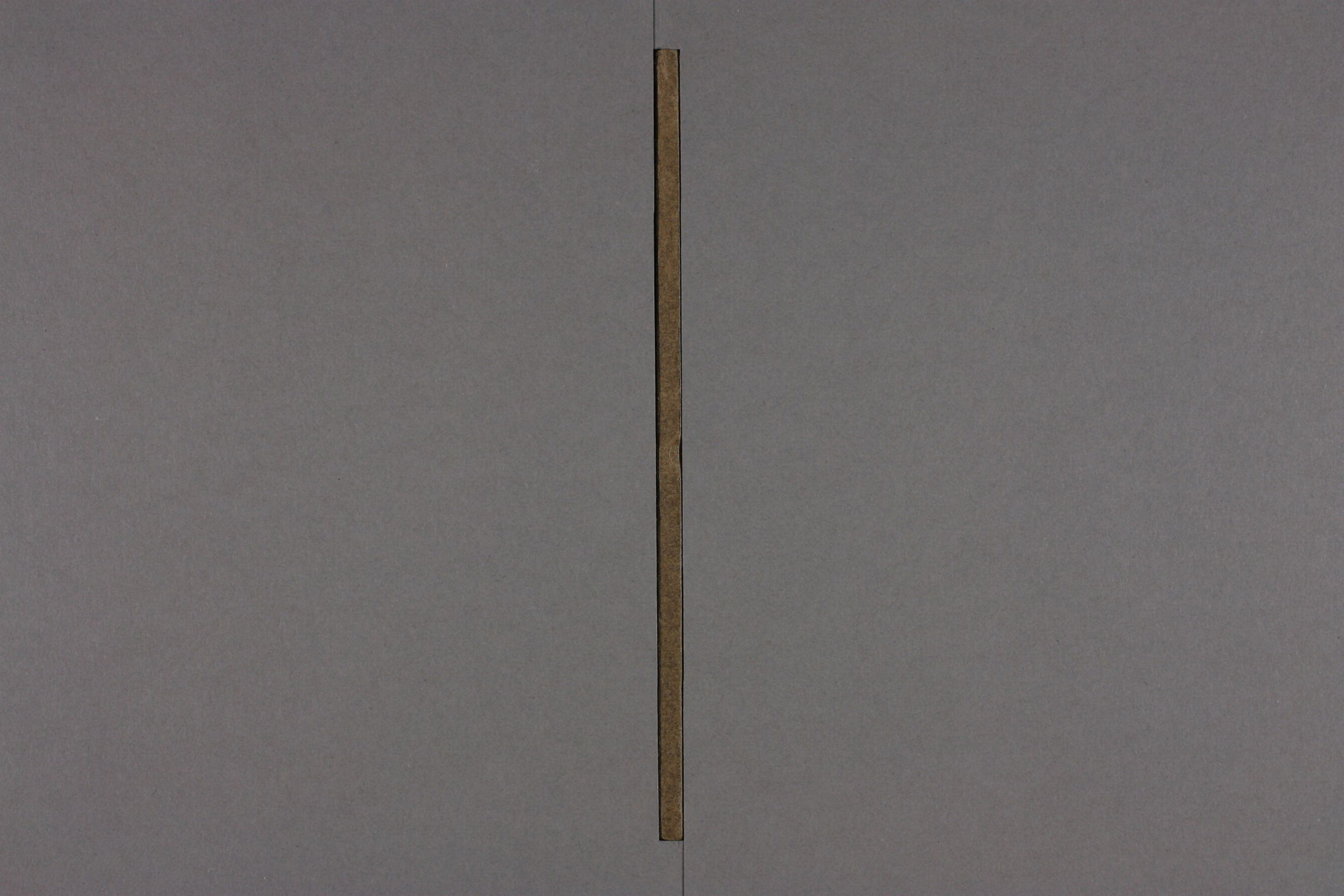


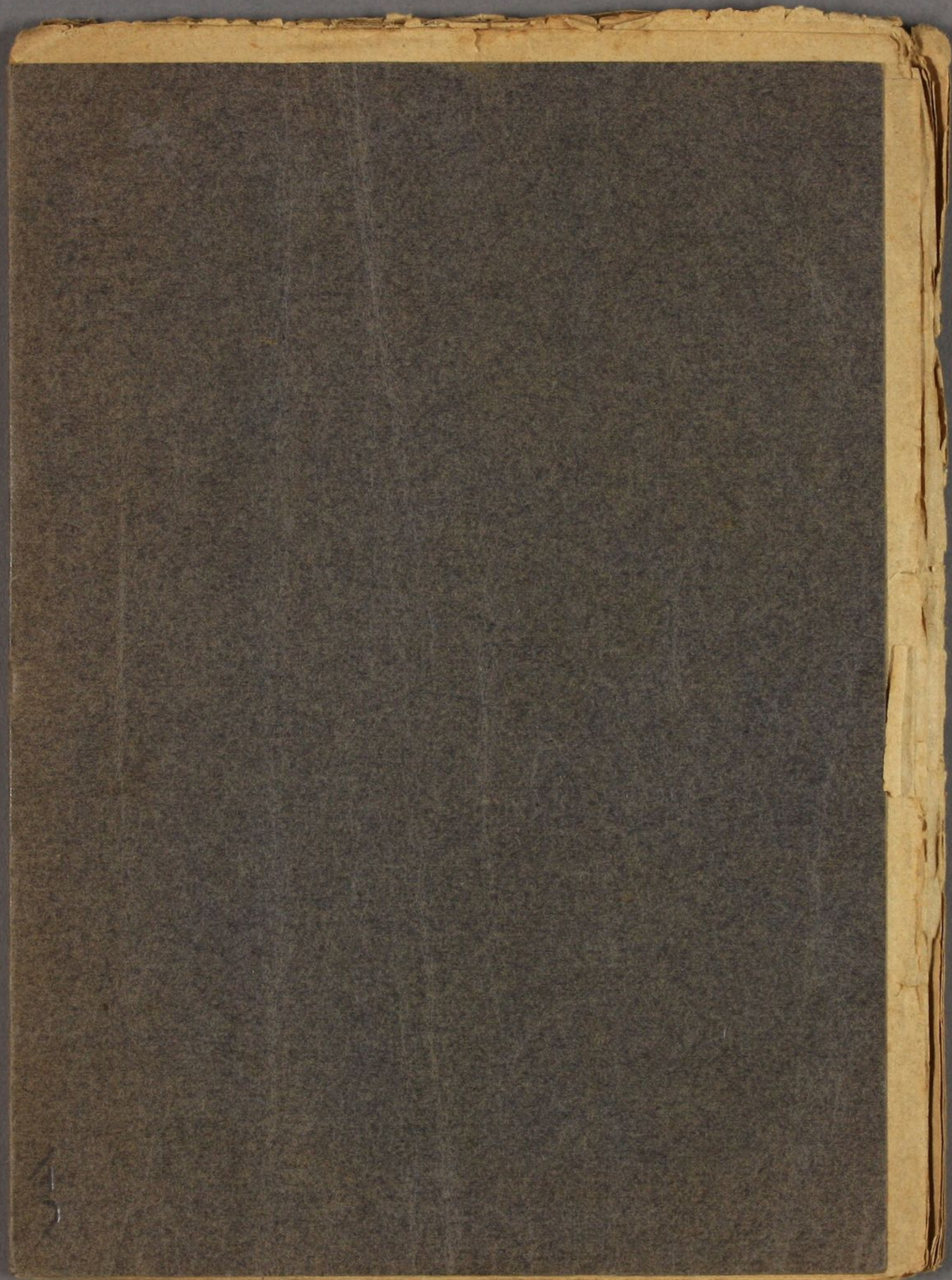
俗體詩

堺枯川序文
岩本無縫著

行發堂光政京東







俗
體
詩

堀
利
彦
序
岩
本
無
縫
編
著



世に神様の頻々として出現する時、社會黨は平然として衣食住の問題を論じて居る。世に天才主義の流行する時、社會黨中には凡人社を起す者がある。されば世のハイカラ新體詩に對して、社會黨の詩人が俗體詩を吟ずるは、實に當然の事である。霞外、無縫の二子、其才の發する所、或は演劇となり、或は講

談となり。殆んど往くとして可
ならざるはなきの有様である。
俗體詩の如き、亦た只だ其の妙
技の一である。

社會黨は俗體詩の作者たる二
子を有するを以て誇とすべく、
世人は二子の俗體詩に依つて社
會黨の心意氣を知るべきである。

社會黨の凡俗人 堺 利彦

序のかわりに

無 縫

▲あだむらさき

辻を曲つた提灯は、ゆかしかよふが女文字。
父をたすけて十八年を、朝に夕に提灯張りの、
ぢつと耐ゆる胸の火の、泣くに泣かれぬあは
れを思へ。庭の朝顔あだむらさきの、咲かす
に散らしてならりようものか、秋の嵐が吹く
度毎に、思ひ出すぞやみじめな浮世。

▲心中

死ぬが厭なら生きても居よが、又と逢えない間ではないか。夏の日南の縋ゆるみ桶、縋がゆるんでくづれよ手桶、くづれて燃え切りや思ひが盡さる。

▲泣寝

添へぬ飽の片戀と、名も恨めしい春の野に、ぢれて泣き寝の涙の玉を、可愛ゆい女蝶が来ては吸ふ。

▲舟の月

月の涼しい夜の棧橋に、鬼灯吹いて人待つは、われを松蟲りんとした、小糸が姿と浴衣で知れる。翌日は落藉れて蟲なく鄙に、『わたしや何うして暮らさりよう』。二人落ち行く舟の月、千々に碎けて更けてゆく。

▲枕問答

宵は酒盛、夜半は口説、小夜更けがたの有明燈に、小首傾げて思ひ羽よせて、枕問答を蟲が聴く。

1

4



俗體詩目次

梵天帶	岩本無縫
穢多の娘	一
權八小紫	三
人生	六
故郷百女	七
この花櫛を	八
秋のといめ	九

落人姿……………一〇

あの板廂……………一一

一本樫……………一二

山の湯……………一三

戀に死靈に……………一四

富士見茶屋……………一五

浦里時二郎……………一六

魚河岸……………二〇

銀座の柳…(狂調)……………二一



圖書館の机が曰く…(狂調)……………二三

江戸心らぢぢ……………二五

御獄大根……………三一

山て小謠……………三五

鯉ウ鯉ウ……………三九

瓜盗人……………四一

源ちやん……………四九

淺草海苔……………原 霞 外

機織歌……………四九



梵
天
帶

岩本無縫

4

血祭	六〇
落ちた涙	六五
貧ゆえ	六八
夜の色	六九
乞食の兒	七五
下層の涙	七八

俗體詩は薄月夜の讀物である。若し誤つてこれを白晝に繙かば、文字は忽ち日光の爲めに消え失せるであらう。……

無
・
縫

穢多の娘

岩本無縫

泣^なく^に泣^なかれぬ
花^{はな}も^も咲^さかない
花^{はな}が^が咲^さかうが
雁^{かり}が^が歸^{かへ}るが
遠^{とほ}い^い布^ハ哇^ワに

世^よに^に嫌^{きら}はれて
來^きて^はや^や三^{さん}年^{ねん}
燕^{つばめ}が^が來^こよが
雀^{すずめ}が^が啼^なこが
わ^わた^たし^しの^の身^み命^{めい}
淫^ぢ賣^{ばい}婦^ふの^の稼^{かせ}業^{ぎやう}

同業女は歸るか
舟が來たよな
窓に出で見りや
遠い布哇に
わたしや穢多の娘

浦山しさや
夢さゝつけて
たゞ月が射す
來てはや三年
世に嫌はれて。

權八小紫

宵は酒盛
泣いて寢につきや
主は歸るか
又と逢へない
泣いて別れちや
笑ひなんしと

夜半は口説
はや曉の鐘
歸さにやならぬ
この後朝に
思ひが残る
目と目に涙



主は着いたか ○
 青い矢來の
 わしが此の世の
 松葉松葉の

あゝの鈴が森
 空蒼く松は
 思ひをうけて
 一本つゞに
 涙が光る。

主を可愛の

涙が光る。



黒い小袖に ○
 主は今頃
 駒は四ツ白
 前に立てたる
 思ひ出しても

繩かけられて
 高輪あたり
 南をさして
 大身の槍は
 命がちとむ

思ひ出しても

命がちとむ

人生

春は花さく 草木が芽ばむ
 芽ばむ草木に 霞がかゝる
 人は働らく 意がはげむ
 はげむ意に 光りが満ちる。

故郷百女

之れを思ふて歌はざる、涙となる。之れ
 を歌ふて笑ふ、快となる。まことにふる
 さとは、母にえをかけたるが如きもの
 なり。先づこゝに百篇のうち八篇を試む。
 この花櫛を。秋のといめ。落人姿。あの
 板廂。一本櫂。山の湯。戀に死靈に。富
 士見茶屋。即ち是れ。

この花櫛を

軒に鹿なく
峻高く寒いが
芒がくれの
ぬくい温泉に
餅の十五夜
雁がなくぞへ
木曾の櫛賣
雪の面輪で
誰にやらうか

信濃の國は
木の實がうまい
富士見ながらに
肩まで浸たす
菜汁の秋は
諏訪湖の空に
檜笠をかむり
「櫛めしませ」と
この花櫛を。

秋のとゞめ

粃を打つとて
庭の柿の木
三毛がじゃれつく
姉が笑へば
婆々がお珠數を
秋の止めは
晩にや行さましょ
都役者の

寄る稻むしろ
鴉を追ふて
柿守案山子
妹がころげ
さげて出る
この一筵
村盡の芝居
上手がござる。



桐の花散る
 呼ばば隠れて
 こなた見えて笑む
 藁を打つ音
 石の小橋で
 草の白根が
 青い蛙を
 長い轍の
 豆の嫩に
 あ
 の
 板
 廂

あ
 の
 板
 廂
 隠れて覗く
 初嫁すがた
 五兵衛が背戸に
 野川を越せば
 葦の手書
 染模様
 痕ゆく水は
 雨降る中を
 ぬくは



飛んで行きたや
 まゝになるなら
 すがる芽の根が
 まねく芒が
 舟で逃げよか
 岸を行かうか
 青い月踏む
 製糸工場を
 栗は盈むだよ
 落人姿

あ
 の
 月
 世
 界
 雁の羽かりて
 あねいもと
 父母ならば
 芒が招く
 芽の根がすがる
 落人姿
 撮の月夜
 抜け出た二人

手鍋米背負ひ
 石の湯槽の
 棋の高低に
 浴衣すがたの
 鐘も鳴らない
 更けて寝覺の
 細い湯瀧に
 聲に惚れたよ

山の湯

山湯にのぼる
 朝ぼらけ
 啼く駒鳥や
 夕暮を
 山の
 耳元の
 女がうたふ
 峰の月

澤蟹は目を
 田螺ころがる
 清水掬びて
 朝草刈の
 草の匂ひに
 丸い野山に
 一本の櫨の
 初夏の光り
 男櫨の木魂が

一本櫨

動かしかして
 細谷川に
 辨當ひらく
 むすめが三人
 折さしたるは
 夏の花
 葉と葉を
 股に照る
 魅入りはせぬか

戀に死靈に

鳴惚梓峰唐戀裏柿
けれた巫女のの澤にのの
よた女の胡弓松瀧瀧死酒實
蟋男がは風松瀧瀧に肆ほ
蟀がは風松瀧瀧に肆ほ

月ある頃を
梓巫女よび入れて
口よせを聞く
遠音によせて
あの杉の風
ものゆかしさよ
無理だとならば
死ぬそれまでは。

富士見茶屋

原何今登茶松代甲
の所年り屋葉の々州
名へ嫁庭のの娘句光境
物入るのののはにるの

富富士見茶屋
真鍮茶釜
浅黄蕎麥
姿がよらて
馬子なやませる
桐の木切つて
箆筒をさすか
なくなりまする。

浦里時二郎

魂こほる
雪はしんく
今宵は雪ゆへ
にくい浦里
松に縛して
偲び泣く音を
貫ひ泣きする

此の丑三つを
松さへ折れる
鴛母のお杉
雪責めにとて
責めさいなまれ
みどりも俱に
いたいけ姿

わたしや今宵で
舌が凍るか
息が火になる
焦れる其火で
こゝを出ように
細い柳の
雪に折られて

もう死にますぞ
息さへ出ない
術もあらば
繩焼き切つて
悲しやわしは
廓のからだ
もう死にますぞ

息のある間に
聲が聞きたい

○

松をたよりに
人目包んだ
心も空に
繩もとくく
口に移した

唯もう一と目
唯一聲を

屏乗越へる
黒頬冠り
飛び縫りつき
浦里かへ
戀雪水に

手拭覗いて

「さわぐまいぞな
直ぐに逃げる」と
夢の廓の
かあいくと

「アレ時さんか」

これ浦里や
支度にかしりや
空とびながら
啼く明鳥

昔^{むかし}お柳^{りゅう}のあはれな咄^{はなし}
 知^しつて居^おりやるか人間^{にんげん}様^{さま}や
 恨^{うら}めしいぞへ市區^{しきく}改正^{かひせい}委員^{ゐん}、
 曉^{あけ}の鴉^{からす}から夜^よ中^{なか}まで
 浴^あびせられるよ埃^{ほこり}と塵^{ちり}を
 何^{なん}の因果^{いんぐわ}で銀座^{ぎんざ}の中^{なか}へ、

銀座の柳

(狂調)

魚河岸

鮪^{まぐろ}庖^{ぼう}丁^{てう}が光^{ひか}るげな
 河^か岸^{あし}には鱗^{うろこ}が光^{ひか}るげな
 掌^てに手^てに銀^{ぎん}貨^{くわ}が光^{ひか}るげな
 兄^{あに}イの啖^{たん}火^{くわ}が光^{ひか}るげな
 ところへ朝^{あさ}日^ひが光^{ひか}るげな。

棒で叩かれ小僧にゆられ
 足は煉瓦の枷はめられて
 何んで肥えよかわたしの樹身、
 見捨てしやんすな銀座の柳
 春が来たなら靡いて見せう
 可愛がらんせ笑ふて見せる。

図書館の机が曰く

(狂調)

私の面になにがある
 錐の痕墨の粕涎の跡も
 與三もはだしの小刀疵も、
 歌が書いてある戀の歌
 山水天狗に相合傘に
 おかめひよつとこ蝴蝶にとんぼ、



來るく 博士に小僧に隠居
 讀めぬ 洋書をひねくる 半可
 ベットじやあるまい 寢に來る野郎、
 上野の翠微に蟬がなく
 紅葉に雪見に朧夜の鐘
 圖書館に住居も悪くはないが
 机裏の鼻糞にはこまる。

江戸むらさき

鉛 中山 北次
 鐵 村 山
 迂 秋 權
 人 子 湖 雨 郎

御嶽大根

鉛鐵迂人

御嶽おんたけよいとこ大根たいこんの名所めいしよ
 酒屋さかや三里さんりに豆腐屋とうふや一里いちり
 一里いちりあるとも何事なにこと欠かぬ
 熱あついフロフキ精進せうじんナマス
 手前てまへ濁酒にごり酒に女房にようばのお酌しやく
 何をなにを云いはしやる都みやこの御人ごじん
 シチウカツレツまじろ鮪まぐろの刺身さしみ
 それも跣足はだしの甘味あまみがござる

今朝は夙うからお里を連れて
 山の畑に大根の収納
 お里抜ぐく真白い手して
 小春最中の紅葉の溪に
 反響す小諸の節面白う
 何を云はしやる都の御人
 両の客間に三味とる歌妓か
 それにや見られぬ可愛さがござる

二

最早晝飯時小松の丘で
 二人並んで結飯をとけば
 家媪が甘煮のお芋のおかず
 つまむ手ぶりのあのしほらしさ
 どうせおいらは幸福者じや
 何を云はしやる都の御人
 上野浅草隅田の堤
 そこじや出来ねー楽しみがござる

三

收納つた大根は清水で洗うて
 わし等二人で筏に乗せて
 多摩川を流してお江戸に出ます
 そすりや兩岸には小鳥がうたふ
 これさ聞かしゃれ都の姉サ
 燕脂を捺摩つたチツチャイ口で
 大い澤庵食はないものか

四

ヤーレ背負へ〜五丁の坂じや
 百舌鳥が来て鳴くもう日が暮れる
 アレサ向ふの小山の蔭で
 風呂が沸いたか貝吹き立てる
 これさ聞かしゃれ都の御人
 一日かせいで勞れて汗を
 可愛い女房があつさり洗流す
 こんな氣持ちは自慢じやないが
 都市の錢湯場じやよう見られまい。

五



山で小謠

山やまで小こ謠うたは空そら兵衛べゑが
 浮うき世よをよその詫わ住ぢ居る
 今いま年とし十九じゅうきゅうのお染そめ見こに
 婿むことらせうの願ねがひ哉かな
 村むらの三さん太たは容かほ貌りようよし
 男おとこざかりで金かねためて

山の子

氣前きまへさらり、のあれのうと
 お染そめほの字じに頬ほを染そめた

好すいた間まなら惚ほれてもよかる
 惚ほれた間まなら添そうてもよかる
 くツつけ、ひツつけ、もつれ糸いと
 もつれ合あうたが世よじやものを

三太みつたをどうじやと空兵衛くうべゑは
 ほくそゑみくふりかへる
 ふりかへられてお染そめ見みが
 顔かほ見みせまじと耻はぢらうた

からかひまじりの一言ひとことで
 心こころ見みられる悔くやしさに
 嫌いやと云いひたし嫌いやとは云いへず
 惚ほれた因果いんぐわを今更いまさらの



鯉かウカ鯉カウ
 お江戸エドなりやこそ土つち一升いっしやう金かね一升いっしやう
 箱庭はこにわの様ようなと田舎いなか者ものがわらふ
 これでも夏なつさへ来くれば緑雨あはれあめ
 酒屋さかやは新道しんみちに御用ごようがあらば
 豆腐とうふやは毎晨まいあさの呼聲よびこゑに覺さされても
 やつぱり聞きかれる杜鵑ほととぎすの初音はつね千兩せんりやう

初松魚

中村秋湖



好すいた間まなら惚ほれてもよかる
 惚ほれた間まなら添そうてもよかる
 くツつけひツつけもつれ糸いと
 もつれ合あうたが世よじやものを。

鯉ウ 鯉ウ ○
 織色の鯉口衣が見得ぢやア無へのさ
 水に干ぬ盤臺は此方等が商賣の當然
 よ夕月にキラリと光る勢ひの初物と
 松葉山道の向鉢巻
 此聲ばかりが自慢の賣りものだ
 エ、買へ買へ買へ生の魚よ

鯉ウ 鯉ウ ○
 布子典したら嬢アがわめく
 それ承知もとより合點
 年越しに着物持たぬが何で耻だ
 どんぶりにうごめくは、とつたばかり
 の生きた銀よ
 江戸ッ子は此面が先づ第一の寶物さ
 何の汝等に此味がわかるものか

鯉うなぎウうなぎ ○

價ねをきく程ほどなら買かはねへがい、
 俺おれア喰くふんだ見みるんじやア無ねへ
 頼たのむよ片かた身みは厚あつく作つくつて呉くんねへ
 來きたな五ご合がヲと大たい根こんを忘わすれめへせ
 鐵てつやい喜き三さんやい留とめツ子こも來こい
 翌あすは裡はた體かだが今け日は幸さいと未まだ肌はたぬぎよ。

瓜うり盜ぬす人びと

北山きたやま權ごん雨あめ

瓜うり盜ぬす人びとよ待まちてしはし
 見みればおぬしは年とし若わかな
 似にるともようも似にたものよ
 死しんだ息いき子こと瓜うり二ふたつ
 俺おれと二ふた人にんで喰くつたのも
 こんな月つき夜よの晚ばんじやつた

瓜が欲しうておぬしは来たか
 おなじ喰ふなら一緒に喰つて
 ちやんと一言いふてくれ
 あゝこれ逃げるか俺あ父だ
 足の利かぬを知つての事か
 後生しらずがこれ此通り
 掌を合しての御願だ
 ちやんやと言ふて言ふてくれ。

源 ちやん！

次

郎

蝙蝠啼いてあの父島の
 港静かに灯ともし頃を
 今年五つの源ちやんは
 伏床をぬけて窓による
 むごたらしくも唇は
 裂けてうるみて
 「母ちやんよ！」

根元に船は繋がれて
磯の濱桐はらくくと
向岸の村の人散れば
赤い草履に砂立てゝ
可愛い眼に露ふくらませ
赤い睫で

「母ちゃんよ！」

八百屋の姐さん右隣り
お膝の上に源ちゃんの
お手をとりにて此のやうに
「お前の母ちゃん西島へ
魚釣り故おとなしく
妾と一所に遊ぶのよ」

西島よりの船便はあれど
 源の母ちゃんつい見えず
 綿奴は白い舌を出し
 鼠は林投樹の實を噛る
 もう秋過ぎの今はたゞ
 お砂糖しぼる牛の唄

お雑煮食べる正月も
 源の母ちゃんつい見えず
 思ひ迫つて源ちゃんが
 隣家へ行つては姐さんの
 お膝をゆすつて
 「母ちゃんは！」
 濱邊を迷ふて
 「母ちゃんは！」

憐れ悲しい聲となり
 桐の緑の影さへ消えた
 どうして母ちゃん歸らぬか
 どうして母ちゃん西島へ
 お垂髪の源が髪結ふた
 姿一目も見るさへあはれ

島で媚好しおきみといふて
 唄に名高い粹女
 源の母ちゃん西島へ
 ゆく其の船の船長を
 隠夫して逃げ去つた
 家も吾子も振り捨てし

源の父親はその日から
 嫌つた酒も呑抜けに
 酔ふては管を巻きながら
 罪なき源を叱るのを
 聲きゝつけてお隣りの
 姐さん源やを袖にして
 父親ごめんよわたしが詫びる。

浅
草
海
苔

原
霞
外



機織歌

(工女が歌へる)

原霞外

わしが生うまれは越あち後の在あいよ

女をんなはだへは雪ゆきの國くに

寺てらの和わ尚せう様さま御お慈じ悲ひが深ふかい

七十八しちじゅうはちの生いまぼとけ

村長そんちやうさま様さまはつむりが禿はげて

奥おく様さま若わかい薄うす化粧けしやう

あの學がく校かうの先せん生せいさまは

豪れい學がく者たじやと申まうします

隣り村との水論さへに

先生ひとりてなかなほり

二

わたしや十二で父者に死なれ

十三十四泣きあかし

十五の春に都へ旅路

思ひ廻せば二年あと

今年十七夜毎の夢は

帯が買いたや京臙脂も

紅い振袖あだ美しい

他家の嬢様見るたびに

死んだ父者を勿體なふも

恨んで泣いて居りまする

泣いて眠れば枕もしめる

夜着の袖さへ肌さむら

からして織つた此綾衣を
 着るも人なら織り手も人よ
 ほんに思へば身がうとましい
 天道様もなさけない
 村の鎮守へあれ程までに
 供物あげたも何のため

蚤もせれば寝もやすからで
 聞くは淺草あけのかね
 又も苛責の咎のもとに
 つらい労働の今日も來た
 あの監督の意地わるさ
 技手の髭面にくらしい

三

苦勞せうとて拜みはせぬに
えゝあんまりな神ほとけ

こんな事なら一層の事に

四

落ちた小川にいつく迄も
魚とあそんで居たものを

救ふてくれたは太五兵衛様の

ひとりむすこの金太さん

色が白うて愛嬌ようて

可愛い見ぢやと褒められて

逃げかくれたも十年むかし

今年二十歳にならしやんす

筑波おろしに便を聞けば

まだ獨身は何として

山河へだつ故郷のそらに
 母さん今年五十八
 別れの曉に太五兵衛様と
 わしを送つて村はづれ
 もう行きやるかと袖ひきとめて
 壯健でのうとすゝり泣き

何日ぞや盆のお祭の
 踊りに妾が手を交つて
 忘れまいぞとにこやかに
 覗きこまれたはづかしさ
 五
 あゝ思ふまい身ばかりか
 我身ばかりで無いものを

風かぜも引ひきやるな水みづ飲のみ過すぎて

病やみ患わづらひをせまいぞや

ときどき音な便より安あん心しんさせや

そなたの歸かへるそれまでは

死しにはせぬぞよ佛ほとけのまへに

蔭かげ膳ぜんすえて待つて居ゐる」

あのお言こと葉はは今いま更さらながら

あついで涙なみだのたねとなる

あれ鈴すずが鳴なる、わたしを呼よぶは

かなしい友とものお蔭かげさん

あれも可か愛あいや双ふた親おやなして

「え、今いま行ゆくに待まちたしやんせ

泣なきに行ゆかうか涙なみだを拭ぬいで

また叱しかられぬそのうちに。

血祭

老爺

お代官とて容赦があるか
斯うなるからは百年目
百姓じやとて人じやもの
食はずに生きて居られうか
何うせ死ぬなら此怨み
晴らして死なう喃太郎作よ

太郎作

ほんに老爺の言ふとほり

年が年中膏汗

雨の朝に風の夜に

苦勞さんく其上で

ヤツと果報の實が出来れや

ソレ年貢!

ヤレ何じやのと嘘たれて
 片ツ端から奪りたてる
 厭じやと言へば真つ二つ
 代官様は強盗じや
 喃芋作よ然じやないか

芋作

ソンナ操言いはうより
 モウ焼糞だ鋤に鋤
 蕙の旗に竹の槍
 攻め太鼓は誰れが打つ
 法螺貝吹くは己が役

老爺

先づ腕試し、膽試し
 村の難儀を知らぬ顔
 代官にへつらふ庄屋奴の
 白髪ッ首をひん抜いて
 門出の血祭、サアつとけ。

落ちた涙

都はなれた片山里の
 田舎娘の妻ぢやとて
 胸にや血もある涙もござる
 戀といふ字を知らぬじやないが
 春花の雫で小指を染めて
 文まいらせん殿御もあらず

梅の香りにツイラかくと
 いさゝ小川の岸邊に來れば
 水にながれる朧の月に
 寂しさうだよアノ子守唄
 『辛い奉公もモ一今日かぎり
 明日は嫁入り妾が殿は
 あの藪際の次郎兵衛後家の

獨り息子の忠三郎よ』

えゝうらめしいアノ子守唄
 妾も負けぬ氣聲張りあげて
 泣いて唄ふて歌ふて泣いて
 泣いた涙が小川に落ちて
 落ちた涙をのせ行く水を
 飲んだ男子が妾しの殿御。

貧ゆえ

貧ゆえと思へば、慙れ、泥坊を
 探す役目も貧からと
 思へばつらし、雪の夜を
 外套一と重に身をつゝみ
 寒さにこぼるサーベルの
 柄の間眠る時も無く
 軒端の犬を友の身の
 家には嘸や女房が
 吾身案じて獨り寐の
 煎餅蒲團はなほ寒からふ。

夜の色

泣く見に乳をふくませて
 女房小聲に怨ずらく
 喃こちの人、冬が来る
 冬が来るぞへ、こちの人
 つゞれの裕一枚で
 こなさん、冬をすごす氣か
 わしやお前は、何のやうに
 何としてなと過ごさうが

可愛相なは見やしやんせ
 罪も頑是も無い此兒
 こなさん坊が憎いのか
 坊が可愛は無いかいな
 亭主盃下に置き
 目をひき出して怒鳴るらく
 ナニ吐しやがるお多福め

俺だからって道樂や
 好きで貧乏するじやなし
 意氣地のねえ父親を
 もつたが因果の此餓鬼が
 手前ソレ程可愛けりや
 坊と一所に心中しろ

野^や猛^{たけ}る^か嬢^{ぢやう}の^の手^てを^をと^とり^りて
 野^や郎^{らう}は^は聲^{こゑ}を^をひ^ひそ^そめ^めつ^つゝ
 女^{をんな}の^の方^{ほう}か^から^ら暇^{ひま}く^くれ^れと
 言^いは^はれ^れて^て何^{なん}と^と返^{へん}答^{たう}も
 出^で來^きね^ねえ^え程^{ほど}の^の此^{こゝ}己^{おれ}を
 亭^{てい}主^{しゆ}に^にも^もつ^つも^も前^{まへ}の^の世^よの
 約^{やく}束^{そく}ご^ごと^と、[、]諒^{あやま}ら^らめ^めて
 嬢^{ぢやう}よ^よ、[、]後^ご生^{しやう}だ^だ今^{いま}し^しば^ばし
 頼^{たの}む^む辛^{しん}棒^{ぼう}し^して^てゝ^ゝく^くれ

破^やれ^れ壁^{かべ}一^{ひと}重^へ彼^か方^{なた}に^には
 屑^{くず}屋^やの^の鼻^かア^アが^が胴^{どう}魔^ま聲^{こゑ}
 お^お前^{まへ}は^はド^ドコ^コ迄^ま意^い氣^き地^ぢな^なし
 朝^{あさ}か^から^ら晚^{ばん}ま^まて^て夫^と婦^も稼^{かせ}ぎ
 ソ^ソレ^レて^て米^{こめ}屋^やに^に五^ご十^{じゆ}錢^{せん}
 醬^{しょう}油^ゆ屋^や、[、]薪^{まき}屋^やに^に四^し十^{じゆ}錢^{せん}
 壹^{いち}圓^{げん}た^たら^らず^ずの^の借^{しやく}金^{きん}で
 男^{をとこ}が^が頭^{あたま}を^をさ^さげ^げる^ると^とは
 愛^{あい}憎^そが^が盡^つき^きた^た暇^{ひま}お^お呉^くれ

向ふ三軒長家中
 貧ゆえ起る夫婦喧嘩も
 やがて静けき溝板に
 鼠鳴くなる真夜中や
 遙か聞ゆる三味太鼓
 意氣な都々逸三下り
 げに、さまざまの夜の色。

乞食の子

坊が故郷は二條の橋の
 橋のたもとの柳の下よ
 生れて戀しい母親知らず
 今年九歳父親さへも
 何處に居るやら達者やら

たゞ坊一人て大きゆらなつて
 友はあれども皆意氣悪よ
 坊は一人て朝とく起きて
 旦那嬢様奥様がたの
 お袖にすがつて一錢二錢
 それで芋買ふて大福買ふて
 夜は薪屋の俵の間で
 坊は一人てねんねする

寝てもさめても乞食は乞食
 乞食の子よと坊様たちに
 打たれ笑はれいじめられても
 どふせ三界親なし子の身
 坊は一人て小川の岸に
 泣いてうたふて遊びます。

下層の涙

巫山戯ちや不可ねえ雪見の酒と
 汝等はイヤに風流がれど
 其日あくりの己れたちや如何だ
 稼ぎにや出られず裨天まげて
 買つた米さへもう無くなつた
 下層の涙を馳走の酒が
 汝等はソレ程うめえのか
 癢に觸らア汝等が脛に
 喰ひつくからサウ思へ。

* ◆ ◆ ◆ *
 ◆ 定價金十五錢 ◆
 * ◆ ◆ ◆ *

明治三十九年七月二十日印刷
 明治三十九年七月廿三日發行

不許複製

著者 岩本無縫
 東京市下谷區西黒門町十四番地
 發行者 白井三郎
 東京市日本橋區箔屋町十四番地
 印刷者 竹澤章
 東京市日本橋區箔屋町十五番地
 印刷所 丸山舎印刷部

東京市下谷區西黒門町十四番地

發賣元 盛光堂

河村有頂著 (近刊)
渡米問題の第一篇

米國職業篇 上

本書は最も嶄新なる實狀を
吾が同胞に鼓吹し海外立身
を望む者をして満足を與ふ
る爲めに精確に詳述せしむ
の就中労働實況賃金の多少
金儲の方面方法載て餘す所
なし幸に一讀否熟讀先途の
燈臺とせられんことを望む

東京 盛光堂